

現代日本社会におけるカップルの親密関係及び性関係とその国際比較 -セックスレス現象の分析から-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: パッハー, アリス メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20934

明治大学大学院 文学研究科

2019 年度

博士学位請求論文

(要約)

現代日本社会におけるカップルの親密関係及び性関係と
その国際比較 —セックスレス現象の分析から—

**Intimate Relationships among Contemporary Japanese Couples and
an International Comparison: An Analysis of the Sexless
Phenomenon**

学位請求者 臨床人間学専攻
パツハー アリス

現代日本社会におけるカップルの親密関係及び性関係と その国際比較 ―セックスレス現象の分析から―

学位請求者 臨床社会学専攻
パッハー アリス

1. 本研究の目的

2000年以降、特に2010年代以降は、カップル（夫婦）間のセックスレス現象が一般的になった時代である。1994年に精神科医の阿部輝夫は「特殊な事情が認められないにもかかわらず、カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが1ヶ月以上なく、その後も長期にわたることが予想される場合」をセックスレスと定義した。日本家族計画協会によると、既婚者のセックスレス率は2001年に28%であったが、2016年には47.2%に上がり、増加が続いている。本論文では現代日本社会（主に2010年から2018年の時期）において進んでいるセックスレス現象を大きく3つの問題意識から考察した。

1. 日本家族計画協会は、婚姻関係でのセックスレスを進行させる要因として、主に仕事の疲労や出産後の疲労、出産後に子育て中心の家族形態へ変わることで、そしてセックスは面倒という意識などを指摘している。

だが、このような説明だと、セックスレスとは、ある特定の条件を満たせば生じる「法則」のように考えられてしまう。だとすれば、同様の現象は他文化・社会でも起こりうるということが予測できる。だが、西欧ではカップルのセックスレス現象が先述した要因から起きるという議論はほとんどされない。このことからより多くの要因を考慮してセックスレスの増加を説明する必要がある。

また、日本家族計画協会の枠組みで考察すると、社会構造といった外的観点からセックスレスの要因が説明される。しかし、この枠組みでは自分自身のセクシャリティや、カップル間におけるセックスの意味といった内的要因が汲み取れない。外的観点のみではセクシャリティの全体像が把握できず、セックスレス現象が正確に捉えられないのではないかと。

以上のような問題意識から、本論文ではカップル関係及び性関係という内的観点から、セックスレスが生じる過程とカップル関係にとってのセクシャリティの意味を分析した。それを通じ、セックスレス現象がどのような複雑な過程の中で構築されるかを明らかにした。

2. 現代日本社会では特に女性の性意識の変化が議論されている。つまり、女性が社会的地位の上昇を得て望まない性行動において「ノー」と言えるようになったこともセックスレスの増加と関連づけられている。しかし、望まないセックスを断れるようになった女性がどのようなセックスを望んでいるのかは十分に議論されていない。そして、先行研究によればパートナーとのセックスが楽しくなく、「気乗りしないセックス」を行う女性が依然として多いことも無視できない。もし、カップル関係で互いが望む性生活を構築できれば、カップル間のセックス（レス）で苦痛を感じる男女が減るだろう。そして、どのようなセクシャリティを望むのかについては女性側だけでなく男性側についても議論されるべきであろう。

本論文では、先行研究で言われる「セックスはコミュニケーション」であるという思想を問い直した。カップル同士で性生活の必要性・不必要性の合意に至るまでのコミュニケーションの困難性を分析した。

3.さらに、男女間のセックスレス現象は、日本特有な現象なのかという問いを立てた。先に述べたように、カップル間のセックスレス現象は西欧ではまだ注目されていない。そこで調べたところで、西洋社会でセックスレスが皆無だとは言えず、現象があっても議論しにくい状況であることが明らかとなった。そこで、新たな疑問が沸いた。つまり、西欧では、なぜセックスレスは議論しにくい現象であるのかという問いである。

そこで、本論文では、まずドイツ語圏の男女関係の事例を通じて、西欧のカップル関係におけるセクシャリティの思想と、カップル間のセックスレスになることの意味を考察した。

この考察を通して、セックスレス現象を含めたセクシャリティの意味や価値は文化や社会によって形成されるものであることを明らかにした。

本論文の方法論としては、先行研究と自身が行ったインタビュー調査（日本とドイツ語圏の男女）の分析、そしてマスメディアの言説分析を踏まえながら考察した。

男女間のセックスレス現象については、学問領域上、社会学も含めて、わずかしか研究されていない。学問領域よりも、著書、及びファッション雑誌、健康雑誌などに掲載される雑誌記事（メディア）などで雑多な意見が交わされている。その経緯を確認すると、90年代からセックスレスに関する雑誌記事が登場し、2000年代からその記事数は増加の一途をたどり、小説、漫画、ドラマなどの領域でも取り上げられるようになった。しかし、そこではセックスレスを取り上げてはいるものの、それを引き起こす諸要因には詳細に言及しているとはいえない。本論文ではセックスレスを引き起こす諸要因を同定するべく、各メディアでのセックスレス言説を横断的に検討し、社会学的観点から考察を行う。

補注

1. 本論文では性交渉がないカップル関係（セックスレス）がもたらす性意識・性行動の特徴を中心に論じるが、実際のところ、カップル間でセックスをしないことを問題視することはできない。交際相手とのセックスの有無によって、良い・悪い、満足・不満と言うことはできないからだ。カップル間で定期的に性行為があったとしても何らかの不満を抱えている人たちもいる。

本論文では問題視や価値判断をするのではなく、「セックスレス」という現象から、カップル関係においてどのような特徴が見られるのか、そして、セックスレスで不満を抱えている場合、どのような背景があるのかを問いなおす¹。

2. 筆者が行ったインタビュー調査を紹介する第5章では、一つの同性愛カップルにおけるセックスレスの事例を紹介するが、本論文では男女間の性関係に限定する。同性愛、両性愛などの性的マイノリティのセクシャリティは重要なテーマだが、2000年代から現在までのセックスレスの言説は異性愛カップルに限定されて議論されてきたためである。

社会学の領域では現在、クィア理論やセクシャリティの多様性に関する研究が盛んになっている。だが、本論文の問題関心はセックスレスが生じるジェンダー差は存在するのか（例えば、パートナーとの望まないセックスに応じることや、結婚後・出産後の意識にジェンダーの差はあるのか）についてである。また、異性愛と同性愛では性的枠組みについての問題意識が異

¹ 実際のところ、カップル間のセクシャリティ全体に問いかける必要がある。セックスレスは問題の現れはその1つである。

なる場合もある。そのため、本論文の分析対象は異性愛のカップルに限定して「男女関係及び性関係」の実態を整理する。

2. 本論の構成及び各章の要約

第1章 セクシャリティ研究

第1章では、社会学はどのような観点からセクシャリティと向き合ってきたのかを整理した。

これまで、日本でのセクシャリティ研究は医学や歴史・人類学領域などで主に行われてきたが、社会学の側面からの研究はまだ少ないため、第1節ではまず西欧のカップル関係、及び性関係の社会学理論を整理した上で、日本の理論との相違点を整理した。続けて、第2節では、セックスレス現象と関連する性意識・性行動の実態調査を整理し、2000年代から現在までの性意識・性行動の特徴を把握した。

第1節 社会学領域のセクシャリティ研究

第1節では、セクシャリティの社会学理論を紹介した。

社会学の特徴は、性愛・セクシャリティを「感情」として捉えるだけではなく、社会関係とその社会的実践とする行動として扱う点である。加えて、人間が性的な行動や性経験をすること、感じることは、「自然」や「本能」ではなく、個人や集団で形成されたものであり、「セクシャリティ」の意味も文化や社会、時代により変化する。このような理論を踏まえ、筋書きと枠組みの理論と、性的アイデンティティ（自分自身のセクシャリティ）というセクシャリティの思想を紹介した。

加えて、日本では「カップル間のセクシャリティ」の研究はまだ乏しい。西欧ではセクシャリティを中心的テーマとする研究は「カップル社会学」や「家族社会学」などといった社会学領域にあるが、日本で同様の領域の、カップルや家族の研究を見ると、セクシャリティではなく、母子関係、夫婦の役割分担などのジェンダー規範の研究が多い。

そうしたことから、西欧の社会学領域では男女関係、及び性関係の独自の研究は存在するが、日本ではこのような領域の研究はまだ乏しいことからセクシャリティの全体性が捉えにくいことがわかった。

第2節 現代日本の性意識・性行動の実態(2000年～2018年)

次に、本論文の議論の前提であるセックスレス現象について、実態調査を踏まえて検討した。そして、セックスレス化をもたらす性意識・性行動と実際にセックスレス化が進んでいるのかという論点を若者層と中高年層に分けて把握した。そこで、各世代でセックスレスが増えていることが明らかとなった。

セックスレス現象が2000年代から増えていると言われている中、セクシャリティが世代別（若年層や中高年層）にどのように変化しているのかをまず知る必要があった。世代別に性意識・性行動におけるトレンドを考察することで、セックスレス現象がもたらす背景が明らかになると考えた。特に、若者の性に関しては、2005年頃からそれ以前とは異なるトレンドが顕著になった。例えば、交際経験率や、性的欲望（イメージ、関心）の減少が見られる。性的な欲望の減少に関しては特に女性に見られ、性差も大きくなっている。

それに対して、中高年の既婚者のセックスレス化が進んでいる。例えば、カップル間の性的な不満だけではなく、カップル間でのコミュニケーションや身体的な触れ合いも減っているこ

とが見られる。婚姻関係の性行為が減っていると同時に、婚外恋愛の増加も特に 2000 年から見られる。

以上のような量的調査を踏まえて、セックスレスが増えていることが明らかとなった。時代や世代により、男女の性意識・性行動における性的枠組みは常に変化しているが現代も急速に変化していることがわかった。

だが、本節では、セックスレスという概念が誕生したことから、セックスレスの増加に結びつくことも考えられることを筆者は指摘した。つまり、セックスレスという定義が一般的に知られ、流通するほどにカップル関係、及び性関係に対する人々の考え方が大きく変わってしまったことも考えられる。

第2章 セックスレス現象の先行研究

第2章では、セックスレス現象における先行研究の学術領域の観点から整理をした。ここでは、2010年から現在までセックスレス現象がどのように語られてきたのかを医学領域、臨床心理学領域と社会学領域から検討した。だが、セックスレス現象は学問領域よりもメディアで話題となっている現状であるため、その後（第3章）ではマスメディアとする公共領域での論点を整理した。現代の日本では、マスメディアでカップル間のセックスレスの話題が広まっているにもかかわらず、いまだにセックスレス現象の要因や特質、そして現在どのように変化しているのかが、明確に把握されていないのが現実である。そこで、本章では「セックスレス」がこれまでどのように議論されてきたのかを整理し、そのうえで、セックスレスの研究の困難と制限を明確にすることを目的とした。

第1節 セックスレスの定義

第1節では阿部輝夫が定義づけた「セックスレス」の意味を示した。

周知のようにセックスレスが頻繁に論じられるようになったのは、1991（平成3）年に精神科医の阿部輝夫が『日本性科学会』に「セックスレス・カップルと回避性人格障害-137の症例から」という論文で初めて「セックスレス・カップル」が問題提起されたためである。1980年代後半から自らの精神科クリニック（アベメンタルクリニック）で、パートナーとの性関係を持ってないという相談を持ち込む患者が増加し、特に性嫌悪症に悩む男性が増加した。

阿部は1994年に「セックスレス」を「特殊な事情が認められないにもかかわらず、カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが1ヶ月以上なく、その後も長期にわたることが予想される場合、セックスレス・カップルのカテゴリーに入る」（阿部 2004）と定義している。ここでいう「セクシュアル・コンタクト」には、キス、ペッティング、裸でのベッドインなども含まれている。

このように、日本におけるセックスレス研究においては、阿部が「セックスレス」について明確な定義を示したことによって、医学領域での研究が始まり、「セックスレス」という言葉は学問上でも、そして日常生活上でも使用されるようになったというのが定説であった。だが、「セックスレス」という定義される以前に、「セックスレス」という単語がこれ以前に既に存在していたことを本論文では示した。また、「セックスレス」状態を「夜が怖い症候群」、「セックスなし」という言葉も使われていたことを指摘した。

以下の第2節から4節では、2010年から現在までセックスレス現象がどのような社会背景と関連づけて語られてきたのかを確認した。

第2節 医学領域の学問的議論

第2節では、医療領域で議論されているセックスレス現象の要因を取り上げた。本節では、男性の性嫌悪症、性欲低下、そしてそれらから生じる勃起障害を紹介した。女性の場合、性嫌悪症、性欲低下（性的関心と興奮が得られない）、そしてそれらから生じる挿入障害（例えば性交渉の間に生交痛を感じる、バギニズム）からセックスレスが生じ得ることを示した。

阿部はセックスレスの実態を「特殊な事情がないにもかかわらず、カップルの合意した性交、およびセクシャル・コンタクトが1ヶ月以上ない場合」と定義しているが、性機能不全からのセックスレスが多い中、定義に反することとなる。だが、セックスレスが生じる要因には身体的要因も含めないといけないため、阿部が定義する「セックスレス」はもう一度考え直す必要があると筆者は考えた。

第3節 臨床心理の学問的議論

第3節では、臨床心理の学問でセックスレス現象がどのように取り上げられているのかを紹介した。臨床心理学領域では、身体的な要因から生じるセックスレス以外に、女性の意識の変化から生じるセックスレスが論じられている。つまり、経済的な自立した女性が増え、それと同時に望まないセックスに対して、夫へはっきり「ノー」と言う妻が増えたことが説明されている。一方、男性の場合、経済不況や職の不安から来る不安により、精神を抑圧されることで自信をなくすと、性欲が減退してしまうという説明がされている。加えて、夫婦間の性生活を重要と考える人が増加していることという要因からもセックスレスが議論されていることを指摘した。

臨床心理の学問的議論に関して、現状ではセックスレスに取り組む臨床心理の専門家が少ないため、症例数が蓄積されておらず、臨床心理の論文も少ない。そのため各議論が体系的に検討される段階には至っていない。セックスレスが生じる背景をより深く解明するためには臨床心理学領域での十分な検討が今後は求められるだろうと本節では結論づけた。

第4節 社会学からみたセックスレス現象

第4節では1.労働とセックスレス、2.出産とセックスレス、3.家族形態とセックスレス、そして4.情報化とセックスレスという4つの視点からセックスレス現象がどのように分析されているのかを紹介した。

1.労働とセックスレスに関しては、玄田と斎藤(2007)がセックスレス現象を労働の変化や状況から捉えている。そこで、玄田が調査した結果、長時間労働とのセックスレスの関連性よりも、職場の雰囲気が悪いと感じた場合、仕事に対するストレスが高まり、性生活に消極的になる男性は少なくないと指摘している。

2.出産とセックスレスに関して、女性側の育児の負担から生じる性欲低下が論じられている。

また、出産後に互い「男女」の役割ではなくなり「母親、父親」としての意識が強まり、互いにセックスをすることか想像できなくなるケースも述べられている。他にも性行為そのものは子作りのためでしかしないと考えることからセックスレスが生じる場合もある。

3.家族形態とセックスレス

家族形態とセックスレスについては人類学者の森木(2017)の研究を紹介した。森木は、日本では「結婚し子どもが生まれると、夫婦の単位ではなく子どもを中心とする家族のあり方になる」ということを指摘している。つまり、子どもと親との精神的な親密性は、男女の繋がりよりも強いため、日本人夫婦は欧米よりもセックスレスが生じやすくなる。このような家族形態は就

寝形態に反映される。乳幼児期に母親と子どもが共寝するという日本の文化は、家族の絆を形成し、強い母子密着関係を促進するが、その代わりに夫婦（パートナー同士）の親密性の構築を困難にすると森木は示している。

4.情報化とセックスレス

デジタル化からのセックスレス現象については主に平山(2019)の研究を紹介した。平山は、社会のデジタル化が進む2000年代、特に2005年以降から、男女のセックスレス化が進んでいることを指摘している。デジタル化が進むことによって、1. アダルトビデオ(AV)、2. オタク文化、3. デート相手を探す手段としての出会い系サイトやアプリ、そして4. 性風俗産業の拡大を指摘している。

以上のようなデジタル化と性意識・性行動の分析結果に基づいて平山は男女の性的な背景を考察している。例えば、アダルトビデオや恋愛ゲームの普及によって、非現実的な性を理想化し、男性が実在の女性との恋愛に困難を感じる。

第2章に考察を行った結果、セックスレス研究は部分的に行われているが、まだ十分な成果をあげていないことがいえる。

第3章 セックスレスはマスメディアでどのように論じられてきたか

本章の目的は、セックスレス現象はマスメディアでどのように論じられてきたのかを整理することである。マスメディアの議論といえば、ファッション・健康（ライフスタイル）に関わる雑誌記事や、ルポタージュが主であり、当事者の体験談が描かれことが多い。2010年以降からはカップル間のセックスレスの実態が中心的に描かれている小説や漫画も誕生する。例えば、2017年の『夫のちんぽが入らない』という題を持つ小説がその一つの例である。

以上に述べたように、セックスレスを経験する当事者の声は主に雑誌記事に掲載されているため、第1節では、雑誌記事においてセックスレスがどのように論じられているのかを整理した。第3章では特にセックスレスの解消法の言説について着目し、特徴を確認した。また、日本のセックスレス現象は日本だけではなく、国外でも注目されている現象であるため、第2節では、オンラインメディアを中心に、世界で日本のセックスレス現象がどのように捉えられているのかを考察した。

第1節 2000年代のセックスレス現象を日本の男性誌・女性誌はどう描いているのか—解消法に注目して—

第1節では、雑誌記事においてセックスレスがどのように論じられているのかを整理し、特にセックスレスの解消法の言説について着目した。セックスレス・カップルの中には、セックスレスでも不満を感じなく、むしろその状態の方がいいと考える場合もある。しかし、今回はセックスレスを改善したい男女を想定している記事に焦点を当てた。セックスレスが問題提起されてから様々な専門家がセックスレスの解消法を提供しているのにも拘らず、カップル間のセックスレスは増加傾向にある。そのため、解消法の特徴の傾向を明らかにするため、本節では「解消法」というキーワードでヒットした19件の雑誌記事を分析対象とした²。

² 18件の内訳は、女性誌の記事が10件、男性誌が7件、そして男女ともに読む雑誌については1件であり、本節ではその記事を分析対象として考察した。

本節で扱った女性誌としては『コスモポリタン』、『an・an』、『からだにいいこと』、『女性セブン』、『サンキュ!』。男性誌としては、『週刊朝日』、『週刊実話』、『週刊現代』、『アサヒ芸能』、『サンデー毎日』。男女向け雑誌としては『AERA』を分析対象とした。『コスモポリタン』と『an・an』は女性ファッ

本論文で扱った雑誌記事の場合、様々な分野の専門家がセックスレスの解消を提案していることが特徴である。そして、その解決方法は本当に効果があるのかどうかは提示されず、信憑性がない。さらに、紹介されている問題提起の根本的な部分と各専門家の提案との齟齬が生じる場合も多い。つまり、読者がセックスレスになる要因は短く説明され、セックスレスの状況についての複雑さには触れられていない。その代わりに、各専門家において、セックスレスが生じる要因としては行動不足（セックス・テクニックの提案）、外的なファクター（デートする場所、セックスをする場所の工夫などの提案）または、自己の配慮不足（女を磨く、相手を褒める、メールをもっとする、会話をするなど提案）が主張される。様々な分野の専門家が筋書き[script]を細かく提案し、読者は、その提案を実行すれば、性生活が満たされるようになるという希望を抱くようになる。そして、専門家とする AV 関係者は夫婦間のセックスレスを解消できないと考えて、婚外セックスを提案し、産婦人科は治療を勧める。他に、日本のハウツーものの特徴は、セックスレスを取り上げる際に、個人の背景は無視され、「男性」と「女性」を一般化されていることが目立つ。このことは、各専門家が解消法を提案する以前から見られる。「男性のセックスレス」と「女性のセックスレス」、「男性の性欲」と「女性の性欲」という構造の上でセックスレス解消法が提案される。

以上、セックスレスになる背景や根本的な部分は複雑な構造であるにも拘らず、解消法は肯定的な行動の筋書きが紹介されていた。紹介される解消法は単純化され、行動の順番は詳細に提案され、手段的であり、行動範囲が狭くなることも考えられる。そして、夫婦間の性生活をどう作り上げるのかという問いと同時に各々の性的な価値や意識については触れていないことが明らかとなった。さらに個々に事例を見なければ、雑誌が述べるようなハウツーでは限界があると筆者は考える。専門のセクソロジストによるセックスレス現象についての言説が、より社会的に公的な領域でもアクセスしやすくなり、それらの議論が注目されることに意義があると筆者は考えた。

第2節 世界で日本のセックスレス現象はどのように取り上げられているのか

第2節では日本のセックスレス現象が西欧でどのように取り上げられているのかを考察した。日本のセックスレス現象はさまざまな国で報道されているが、本論文では特にドイツ語圏に注目することにした。海外、特にドイツ語圏で日本のセックスレス現象が注目されるようになったのは2005年の頃である。そのきっかけとしては、コンドームのDurex社の各国(26ヶ国)における「セクシュアル・ウェルビーイング・サーベイ」の結果が公表されたからである。その調査結果では、日本は調査国中最もセックス回数が少ない国として挙げられていた。セックス回数で日本は最下位であると同時に、性生活の満足度が比較的低いアジア諸国の中でも日本は最低であった。そして、2006年に”A Cross-National Study of Subjective Sexual Well-Being among Older Women and Men: Findings from the Global Survey Study of Sexual Attitudes and Behaviors” (Laumann et.al:2006) という性生活と満足度について関する国際調査が29ヶ国で実施された。その結果においても性生活の満足度は日本が最低であることが明らかとなっている。

欧米で掲載されている日本におけるセックスレス現象についての記事やドキュメンタリーでは、欧米の規範を前提として異文化である日本を論じているという特徴が見られる。現代の西欧・欧米社会では、カップル間の性的快楽 (sexual satisfaction in a couple relationship) が不可欠であるという思想を前提にした議論がなされている。しかし、日本では、カップル間での性的快楽

ヨソ雑誌であり、読者層は20代・30代であるため、夫婦のセックスレスだけではなく未婚のセックスレス・カップルも取り上げている。それ以外に扱う雑誌の読者層は主に40代～50代前半である。

を必ずしも必要としない文化があり、西欧・欧米での議論は、その文化を理解しないまま議論しているとも考えられる。

これらの考察から、なぜ日本のセックスレス化が不安と不思議な現状（無理解）として報道されているのかについて次のような仮説を立てた。

日本のセックスレス現象についての議論では単なる「セックスをしていない」という実態だけ示しているのではなく、「人権」と結びつけて論じられていると考えられる。つまり、現代社会では人間は性的な「自己決定」を持つ権利があるという議論が中心となっている。自己決定の中でも特に「自分が望むセクシャリティを持つ権利」を示す。だが、日本のセックスレス現象の場合、自分自身が持っているセクシャリティをカップル間で発揮できないため「問題」と見なされ、そして「他者性」という立場から日本のセックスレス現象が「問題」と捉えられているという仮説である。この仮説については、現代西欧社会でのセクシャリティ理論に関連させて第6章でより詳細に考察した。

第4章 インタビューを含めたセックスレスの分析

これまでの第1章から第3章まではセクシャリティ研究、主にセックスレスに関する先行研究を整理し、本研究の意義と課題、そして先行研究への疑問と本論文の仮説について述べてきた。次の第4章ではさらにセックスレス現象を深く考察した。セックスレスをもたらす性意識・性行動を明らかにし、日本のセックスレス現象の特徴を考察することが本章の主要課題である。

第1節 先行研究の特徴とその限界

本節では、先行研究の限界を3つの点にまとめた。すなわち、1.量的調査（実態調査）の偏り、2.性的規範の議論の偏りと、3.個人の性意識とセックスレスの関連性、である。これらの点を踏まえた上で、筆者が行なった調査はそれらの先行研究の調査と比較し、次の3点で違いがある。

1.性意識・性行動の幅広い聞き取り調査を行った

カップル外の性行動とカップル内の性行動、そして、ライフイベント（結婚や出産など）によって、カップル関係及び性関係がどのように変化したかの聞き取りを行なった。また、自分自身にとってのセクシャリティとカップル間でのセクシャリティを分けて聞き取りをしたことから、セックスレスが生じる要因を広く考察することを目的した。

2.セックスレスの時間的変化の調査を行った

既に述べたように、公共領域での言説と異なり、ライフイベントや、長期間の交際に伴って、性意識を含めてセックスレス現象はどのように変化するか、その変遷を調査することに焦点を置いた。そして、今回のインタビューでは、1回限りのインタビューだけではなく、2～3回インタビューを続けることで、長時間の交際で生じるセックスレスをより深く分析することを目的とした。

3.国際比較を行った

国内と国外での先行研究の中には、カップル間のセックスレスは日本特有な現象であると指摘されているが、実際はどうか。このような問いを明らかにするため、日本のインタビュー調査の特徴を整理した後に、それらの結果をドイツ語圏インタビューの特徴と比較した。そこで、セックスレス現象は日本特有なのか考察した。

第2節 調査概要

第2節ではインタビュー調査の調査概要を示した。日本人のインタビューは2012年8月から2013年7月までと、2017年4月から2019年4月までである。調査対象は20代から40代の未婚・既婚男女43人であり、自身の性意識・性行動において聞き取りを行った。

ドイツ語圏のインタビューの調査期間は2014年8月から2015年の8月までである。対象者は20代から30代のドイツ語圏の未婚者男女22人。

本論文では、交際しているパートナー（付き合っている相手、つまり彼氏・彼女、または結婚している相手）と長期間にわたり性的な接触のない（ここでは、挿入がない）状態をセックスストレスと定義した。

本論文のインタビュー調査は半構造化であり、インフォーマントにできるだけ自由に語ってもらった。インタビュー時間は1時間から1時間半の間で行い、インフォーマントの望む場所でインタビューを実施した。多く選ばれた場所は、喫茶店やレストラン、インフォーマントの仕事場、筆者の研究室（大学の空き部屋）である。

今回のインタビュー調査では、身体機能の不全によるセックスストレスのインフォーマントはおらず、さまざま社会的・個人的な環境のセックスストレスが見られる。

日本のインフォーマントは次のように表記する。

(F20.X) = 20代の女性,(M20.X) = 20代の男性

(F30.X) = 30代の女性,(M30.X) = 30代の男性

(F40.X) = 40代の女性,(M40.X) = 40代の男性

調査方法として、全てのインタビューはインフォーマントの許可を得て携帯と録音機で録音した。インタビュー以外の場面で事例は録音せずに、会話中、または会話後に記述した。カップル関係及び性関係について語ってもらった人々には彼らのケースを論文や発表に使用しても良いという許可を得た上で記述を行なった。

調査項目

- (1) 属性：年齢、仕事の有無、労働時間、余暇の時間、家族構成など。
- (2) 自己のセックス観：セックスの意味、関心や重要性、性教育の有無、避妊など。
- (3) 性生活の状況：パートナーとセックスをする理由・しない理由、セックスの頻度、セックスの満足度、セックスに関する会話など。
- (4) パートナーとの関係性：一緒に過ごす時間、「男女」でいられる時間の有無、家事分担、パートナーとの関係性の満足度など。
- (5) セックスストレスである場合、その状況：セックスストレスになってからの期間ときっかけ、生活の変化の有無、日常生活での身体的な触れ合いの有無、セックスストレスであることの満足度など。
- (6) 出産を経験している場合、その状況：立ち合い出産の有無、会陰切開の有無、産後の全体的な体調など。
- (7) 婚外恋愛（不倫）の経験の有無：婚外恋愛に至るプロセス、結婚以外の異性とはどのような付き合いなのか、相手と会う頻度、不倫に対する意識、相手とのセックスの状況など。
- (8) 男性の場合：性風俗産業の利用経験の有無、通うきっかけ、夫婦関係で得られないが、性風俗産業では得られるもの、など。

第3節 日本人インフォーマント 22人の紹介

表1 女性のインフォーマント

女性のインフォーマント	年代	セックスレス経験	職業	結婚	
F20.03	20代前半	現在	学生	未婚者	
F20.04	20代前半	現在	学生	未婚者	
F20.07	20代後半・30代前半	現在	学生・社会人	未婚・既婚者	2回インタビュー
F20.08	20代後半・30代前半	過去と現在	学生・社会人	未婚・既婚者	3回インタビュー
F20.09	20代前半	現在	学生	未婚者	
F30.01	30代前半	現在	社会人	既婚者	
F30.04	30代前半	過去	社会人	未婚者	
F30.05	30代前半	現在	専業主婦	既婚者	
F30.06	30代前半	現在	社会人	既婚者	
F30.08	30代後半	現在	社会人	既婚者	
F40.03	40代前半	過去	社会人	離婚	2回インタビュー

表2 男性のインフォーマント

男性のインフォーマント	年代	セックスレス経験	職業	結婚	
M20.01	20代前半	現在	学生	未婚	
M20.08	20代後半	現在	社会人	既婚者	
M20.05	20代前半	過去	学生	未婚者	
M20.10	20代後半	過去	学生	未婚者	
M20.11	20代後半・30代前半	現在(過去)	学生・社会人	既婚者	3回インタビュー
M30.01	30代前半	現在	社会人	同性愛者	
M30.03	30代後半	過去	社会人	未婚	
M30.04	30代後半	過去	社会人	1回離婚	

M30.05	30代前半	現在	学生	未婚者	
M30.07	30代後半	現在	社会人（自営業）	既婚者	2回インタビュー
M30.08	30代前半	現在	学生	未婚	

第4節 未婚者のセックスレス現状－20代中心

第4節では20代のインフォーマントが語るセックスレス要因を紹介した。それぞれのセックスレスの理由から見えてくるのは、過去の経験、その中でも初体験のネガティブな経験が現在の性意識・性行動に強く反映されていることであった。つまり、インフォーマントは快感を感じなかったり、苦痛を感じたり、相手に拒否されることからセックスに積極的になれないことが見受けられる。また、初体験でのネガティブな経験が現在の性意識・性行動に影響を及ぼしていることが興味深い点であった。

女性の場合、パートナーとのセックスを避けたくても、相手が望むとセックスに応じることもある。付き合っていれば「しないといけない行為」という義務意識³も存在した。加えて、セックスの場面でしか得られない身体的触れ合いを望んでいるため（ハグ、キス）、セックスをしていることが明らかとなった。

男性の場合、セックスがうまくいかなかったら（拒否された、バカにされた）、性生活を作り上げるよりも、諦めることが見られた。

男女共通する点は、「愛情表現」も含む「コミュニケーション」としてのセックスが曖昧に認識されていることである。性的な場面で何らかの不満が生じて、相手にそのことを伝えない理由としては1)相手を傷つけない、2)セックスの場面でしか得られないキスとハグ、手をつなぐことを味わいたい、3)相手に自分の気持ちを伝えても「じゃ、どういうことがしたいの?」と聞かれても何を言えればいいかわからない、という3点である。

カップル間でのセックス（と性生活を構築すること・性環境を平等に作り上げること）について学ぶことがほとんどないため、日本ではセックスで苦痛や不満を感じたとしても、それを言葉で表現することが困難である。そのため、お互いに察してもらおうとする。本論文でも、言葉で自分自身の性についてパートナーに伝えるのは困難である。それは、女性だけではなく、男性にも見られた。

第5節 未婚者のセックスレス現状－30代中心

第5節では未婚者でセックスレスを経験した2人の男性インフォーマントを考察した結果、2つのケースが見られた。1つ目のケースでは、インフォーマントは「仕事を一本にしたい」ことから、性欲が低下し、相手に性的な魅力を感じなくなった。2つ目のケースでは、彼女と別れたという思いからセックスが苦痛となり、セックスレスが生じた。

両者に共通するのは、セックスについての関心はあるが、カップル間のセックスはあまり重要ではないと認識している点である。また、両者の場合、パートナー側(女性側)の方は性生活がなくて不満を感じているが、その不満に対してインフォーマントは「無視」していることが見られた。

本論文のインタビュー結果から、未婚と既婚者の間でのセックスレスの要因は大きく異なっておらず、似ている背景からセックスレスが生じていることが明らかとなった。先行研究によると、未婚者（単身者）の方が既婚者よりも性的に活発であり、肉体的、そして精神的満足

³ このような「～しないといけない」という義務意識は男性の方では見あたらない。女性の方が強かった。

感が高いことが指摘されているが、今回のインタビューではそのような差異が見られなかった。今回の2つのケースでは、既婚者との差があまり出ていないのは、同棲していることの可能性が高い。つまり、同棲しない方が性的に活発である可能性がある。今回のインタビュー調査では、未婚者の30代男女には「現在交際相手がいる」よりも「いない」の方が多かったため、明確な比較はできなかった。

第6節 既婚者のセックスレス現状-30代・40代中心

第6節では30代のインフォーマントが考えるセックスレスに至った要因を整理し、その要因は次の3つに集約されることが明らかになった。即ち、疲れとセックスレス、出産とセックスレス、そして家族意識が強いことからのセックスレスである。しかしながら、セックスレスが生じる背景は多種多様であり、複雑な過程を経るため、このことを単純に捉えてはならないといえる。また、今回のインタビューにより明らかになったことは、外的なファクター（仕事の疲れ、仕事の優先など）、カップル間における関係性の構築欠如、そしてカップル間における性関係の構築欠如という3つの要素がセックスレスを生み出す構造と関連しているということである。

また、本来のセックスは自分自身とカップル関係にとって親密な行為または快楽という意味合いが強いものの、子どもが欲しいという願望が生み出されると、本来の性意識が「子作り」目的のセックスにシフトし、2人の性環境の枠組みが変わるのである。そして、出産後においても、2人の親密性を深めるためのセックスに戻すことは困難であり、このことがセックスレスを生み出す一要素として働いているのである。そして、「仕事の疲れ」についても同様のことがいえる。カップル関係よりも長時間労働や仕事が優先されると、カップル間の性意識に変化が生じ、2人の性環境の枠組みが変わる。なお、インフォーマントの中には、カップル間での性生活を作り上げて構築するよりも、自分自身が望むセックスを個別的に処理、またはカップル外で発揮する者もいた。仕事の疲れと出産から生じるセックスレスという両方のファクターは、相手を「男性」「女性」として見ていない一方、「家族意識が強くなった」ことにも繋がっていると推察できる。

第7節 全体のインタビュー調査からの考察

第7節では、これまでインフォーマント全体の共通点と今まで述べられなかった特徴と発見も述べ、次のような項目を考察した。1.性意識・性行動の観点、2.セックスのコミュニケーションをジェンダー差の視点、3.セックスレスである男女は性生活において何を望んでいるのか、4.インフォーマントはセックスレスをどのように捉えているのか、5.セックスレスと非セックスレスカップルの相違点、最後に6.インタビュー後のコメントやカップル間の変化の整理。

第5章 婚外恋愛とセックスレス

2000年代以降からセックスレス現象が増えると同時に、結婚相手以外の交際相手がいる男女が増加したことが先行研究で提示されている。本論文の目的は婚外恋愛（不倫）をしている男女が、夫婦間と夫婦外の性意識・性行動がどのように異なるのかを明らかにすることにある。

そこで、2010年から2017年の間の夫婦と夫婦以外の性がどう描かれているのかを先行研究から明らかにし、合わせてインタビューから得られた結果を論じる。

第1節 婚外恋愛について

第1節では、現代社会の婚外恋愛に関する実態調査との特徴を整理した。

日本における「婚外恋愛」（不倫）については、アカデミックな議論の対象とされるよりも、マスメディアでより広く報道されていることが多い。現代日本社会では、著名なタレントやアナウンサーの不倫が大きくマスメディアで報道され、芸能界では不倫が発覚するとッシングを受け、批判を浴びるケースが多く見られる。加えて、夫婦外の異性との付き合いをしている男女のインターネットブログでも、不倫の経験談の書き込みに対して許容する意見がある一方、批判的なコメントがなされることも少なくはない。

その反面、中高年セクシャリティ調査(荒木 2014)⁴によれば、2000年から2012年の間、夫婦間の性的規範が薄くなる中、既婚者同士の不倫(婚外恋愛、ダブル不倫とも呼ぶ)に対する許容度が高まり、特に、調査対象である40代から70代で配偶者がいるにも拘らず、異性と付き合い合う男女が増加している。また、現代日本社会では不倫を「大人の恋愛」や、「婚外恋愛」、「本気の不倫」と呼ぶようになり、テレビドラマや、本、雑誌などでもポジティブに取り上げる傾向が見られ、不倫に対する2つの価値観が存在することを示した。

第2節 夫婦間と夫婦外の性意識・性行動

第2節では、第1節のように、現代社会の婚外恋愛に関する実態調査との特徴を整理したが、本節では特にルポタージュの言説を中心に取上げた。ここでは、婚外恋愛を経験する男性と女性は夫婦関係でどのような性的枠組みを形成するのかをルポタージュの言説から考察した。続いて、夫婦関係と婚外恋愛との性意識・性行動がどのように異なるのかという特徴を整理した。夫婦間のセックスの特徴として、次の点が挙げられている。即ち、「あっさり」、「オーソドックス」、「性欲処理」である。他方、婚外セックスは、快楽中心である。つまり、自己が望むセックスを味わい、エロチックさを体験するという特徴があり、男性だけでなく女性も性的な主体になっていることが見受けられる。

第3節 インタビュー調査から

第3節では、筆者が行なったインタビュー調査を紹介し、インフォーマントに婚姻関係以外の異性との性的な関係についてどう考えているのかを語ってもらった。さらに、婚外恋愛を経験した3人のインフォーマントをより詳細に分析した。

インフォーマントは、夫婦関係では、男女の性的な満足よりも、夫婦としての役割を果たすことで「十分」であると捉えられているため、性的なコミュニケーションは排除され、セックスストレスになる過程が明らかとなった。一方、インタビュー調査では、インフォーマントの中に、自己の性意識・性行動が十分に満たされていないため、不満を抱え、この問題をどのように解決すべきかがわからない事例も存在した。自分のセクシャリティを重要視すると共に、夫婦間のセクシャリティを作り上げることは家庭内で困難であると考えているのである。こうした点から、夫婦間で満たすことができない身体的触れ合いや性的快楽の追求は、夫婦外で探すことへと繋がるのである。

第1節と第3節を合わせて考察すると、先行研究とインタビュー調査の両者から、夫婦と夫婦外の性意識・性行動を見ると、「性」は家庭と恋愛で二つの領域に分けられるため、それらの性意識・性行動が異なる。夫婦の場合、互いの性的な満足や快楽よりも、夫婦としての役割を果たせば「十分」と評価されている(セックスストレスになりやすい傾向がみられるが)。夫婦間のセックスの特徴として、「あっさり」、「オーソドックス」、「性欲処理」である一方、婚外セックスは、自分自身が望むセックスを味わい、快楽中心であり、夫婦間で得られない身体的な触れ合

⁴ 荒木「配偶者間のセックスストレス化~2012年調査で際立った特徴~」日本性科学会雑誌『2012年・中高年セクシュアリティ調査特集号』第32巻増刊号12,7-21, 2014.

いや、性的な快楽は夫婦外で満たす傾向が見られる。特にインタビュー調査では、インフォーマントは「結婚」というライフイベントにより、子作りのプレッシャーが大きいことや、出産後、夫婦関係よりも子育てに集中することによって、もともと持っている自己の性意識・性行動の活用が困難であることが分かった。家庭内でセックスレスであるが婚外恋愛をするインフォーマントは自己のセクシャリティの自覚が薄く、内面化されていない。加えて、そのようなインフォーマントの場合、家庭内で二人だけの性生活を作り上げることは困難である一方、婚外セックスで自己が好む性を見つけ、性欲を満たす手段としていると筆者は考察した。

第6章 セクシャリティの国際比較

第6章では、西欧的観点から日本のセックスレス現象を取り上げた。まず、第1節では、国際比較の観点から日本の性意識・性行動の特徴を簡単に整理し、西欧的観点から日本のセックスレス現象を取り上げる困難性を明らかにする。第2節から第3節では西欧でもセックスレス現象が見られるのかを取り上げる。本論文ではまずドイツ語圏を中心として、セックスレス現象が存在するのか、もし存在するのであれば、なぜ日本のように広く注目されないのかを、先行研究と筆者が行なったドイツ語圏におけるインタビュー調査を基にして考察した。

第1節 国際比較の実態調査

第1節では、日本のセックスレス現象は海外でどのように注目されているのかを考察した。その結果、性意識・性行動における国際調査では、文化や社会構造の背景などには注目せずに、セックスレス現象を単純化しながら、西欧の視点を前提として分析する傾向が見られることが明らかになった。西欧では、セクシャリティの満足度の高さは、クオリティー・オブ・ライフと強く結びつけられており、セックスレスが生じると、自分と相手の性的な満足感を得られていないという解釈する傾向がある。つまり、西欧の社会的環境の枠組みの規範から「セックスレス」という現象がポジティブには捉えていないことが見られた。

第2節 セックスレスは日本特有なのか、西欧でも生じるのか

次に、これまでの考察を基にして、セックスレス現象は日本特有の現象なのか検討した。その比較対象として、ドイツ語圏に注目した。

セックスレスは日本特有なのか、西欧でも生じるのかという問いを考察するために、まずドイツ語圏の20代男女における先行研究とインタビュー調査に基づき、対象者がカップル間の性をどう捉えているのかを明らかにした。その後、これらの調査結果を、2012年から2013年に筆者が行なった日本人の20代男女のインタビュー調査と比較することで、両者の性意識・性行動における相違点を示した。

その結果、ドイツ語圏ではカップル間のセックスは「楽しい」だけではなく、互いの「信頼関係」を築くための「親密な行為」であることがわかった。また、パートナー間のセックスは、パートナーとして互いに承認するためにも重要である。セックスは自分の存在価値を高める行為となるため、セックスの頻度が減ること、またはセックスレスになるということは、ドイツ語圏のインフォーマントにとっては想像しにくいということがわかった。

第3節 考察

第3節では、先行研究と第2節で示したインタビュー調査を踏まえて、セックスレスは西欧でも生じるのかについての分析を続けた。

その結果、以下のことが明らかになった。現代ドイツ語圏社会では、カップル間のセックスレスは存在するが、セックスレス現象は複雑かつ議論しにくい話題であると考えられている。

日本と異なり、ドイツ語圏では公共領域でセックスレスはあまり議論されていない。なぜならば、現代西洋社会におけるセクシャリティは快楽中心言説が基盤となっているからである。

現代ドイツ語圏社会では、セックスレスの実態把握を中心的に議論されるよりも、セックスレスが生じる前からこのような現状を防ぐこと、自分と相手の性的快楽や満足度をカップル関係の中で作り上げ、構築し続けるという言説が中心となっている。

だが、西欧の家族・カップル・性科学者・カウンセラーたちが毎年セックスレス現象の増加を話題にしていること自体が興味深い。もしパートナー関係でセックスレスが生じると、相手を精神的・肉体的に満足させることができない、自分は病気であるかもしれないという自信の喪失と、カップル関係自体に問題があるかもしれないという不安の両方が悩みの種となり、自分と相手にとって大きな問題と捉えてしまう。そのため、当事者たちは一生懸命に性欲低下の原因を探り、解消する努力をする。

少なくとも、セックスレス現象は存在し、専門家たちは論じていることは無視できない。セックスレスを取り上げる学術書が広まるということは、人々がこうした内容の問題を抱き、必要としているためではないかと筆者は考察した。

続けて、以上のようなことから次のような疑問点と仮説も立てた。現代ドイツ語圏では、「自分自身のセクシャリティ」と「カップル間のセクシャリティ」の両立を求められている。そのバランスがうまく取れて互い満足していれば良いのだが、自分自身のセクシャリティとカップル間のセクシャリティのバランスを取ることに困難が発生すると、性欲低下を引き起こす可能性が出てくると筆者は推測する。その理由を次に挙げたい。

「自分自身のセクシャリティ」というのは自分が望んでいる性的欲求を発揮することである。それに対して、「カップル間のセクシャリティ」は個人の快楽の追求でもあるが、カップル関係を構築するための儀式でもある。「自分自身のセクシャリティ」は快楽の追求であるために、常に同じ快楽の充足方法には留まらない。しかし、快楽の追求に加えて「カップル間のセクシャリティ」は儀礼的側面をも含む。儀礼的側面では、相手から異性でありパートナーとして承認されていると互いが実感し、それによる安心感が重要になる。

このようにセクシャリティには自分自身だけではなくカップル間も含めて、2つのバランスを取る必要がある。ところが、儀礼的側面のみが大きくなると、ただ「カップルである」という確認のために性生活が行われるようになってしまう。そうすると、David Schnarch (2011)が述べている退屈な日常のセクシャリティ[fatigue Alltagssexualität]が生じ、エロチックな性が排除された、日本語で言うところの「マンネリ化」に繋がる。

Lautmann (2002)は性的な退屈さ（要するにマンネリ化[sexuelle Langeweile]）の原因で専門的な相談を受ける男女が増えていることも指摘している⁵。このような実態を防ぐため公共の場では「セックスレス」の実態の議論よりも、カップル間の性生活をどのように構築するのか、自分と相手の性的快楽の満足度を長期間のカップル関係でどのように作り上げ続けるのかに焦点が当てられている（本、カウンセリング、ルポなど）。

だが、現代社会ではセクシャリティの多様性の議論⁶が盛んである中、今後セックスレスに対する味方も変化すると筆者は推測した。そして、「日本のセックスレス現象」の話題も国際的

⁵ 増えているのかどうかはそれでも明確にはわからない：実証データが少ない、臨床データ（カウンセラーにおけるデータ）しか存在しない。

⁶ 例えば、性的な欲求を感じない無性愛[asexuality]や相手へ強い精神的な感情を抱かないと性欲がわからないデムセクシャリティ[demisexuality]などという概念がどんどん拡大し、多様なセクシャリティを認知されるようになっていく。さらに、polyamoryの関係性を持つ人々も増えている中、「男女」という枠組みも再構築する必要がある。

に注目されるようになり、現代ドイツ語圏社会における性的な規範を問い直す機会にもなっていると筆者は考えた。

第7章 全体像における結果と今後の課題

最後の7章では、それまでの論考を整理した。

セックスレス現象について

日本家族計画協会によると、2000年、そしてさらに2010年代から現在に至るまで、夫婦（カップル）間のセックスレス化（セックスや性的接触が月に1回未満）が進行している。家族計画協会によると、既婚者のセックスレス率は2001年に28%であったが、2016年には47.2%までに上昇した。セックスレスが進むファクターとしては仕事の疲労、出産後の子育てを中心とする家族形態、そしてセックスが面倒であることが主に指摘されている。

しかし、このような説明においては、自己のセクシャリティや、カップル間のセックスの意味（価値）の差異に対する言及がなされていないため、セックスレスが生じる要因が単純化されているものと考えられる。本論文では、セックスレスは次の3つの因果関係から生じていることを明らかにした。即ち、外的社会的なファクター（仕事の環境、出産、結婚など）、カップル関係の構築（セックス以外の親密的な時間を作らない、「カップル」の「親」意識への変化など）、および性関係の構築（互いの好きなセックスを知っているのか、セックスについて2人でオープンに話しているのか、マンネリ対策の有無など）である。

また、日本家族計画協会の説明によると、セックスレスが生じることは「自然」なことだと考えられており、同様の現象は他文化・社会でも起こりうるものが予測できる。ところが、西欧ではカップルのセックスレス現象の議論はほとんどされていない。とはいえ、西欧ではセックスレス現象が生じていないわけではないと推察される。

また、ドイツ語圏の男女における性意識・性行動の先行研究と筆者が行ったインタビュー調査を踏まえれば、カップル間のセックスは親密性および快楽を意味する以外にも、個人の承認、相手の承認、グループの承認を意味しているのである。したがって、セックスがない、つまりセックスレスであるというのは個人、相手、カップル関係の否定に繋がることになる。そのため、セックスレス現象は複雑なテーマであり、多角的な検討を要することが判明した。

本論文により、セックスレス現象も含めたセクシャリティの意味や価値は「自然」なものではなく、文化や社会によって形成されるものであることが明らかになったのである。

自己目的的なセクシャリティ

現代日本社会では、特に女性の性意識についての変化が議論されている。そこでは、夫婦間の性規範が薄くなったことと、および、女性の社会的地位の向上により、望まない性行動において女性が「ノー」といえるようになったこともセックスレスの増加要因と関連づけられている。一方、先行研究では、パートナーとのセックスは楽しいものではなく、「気乗りしないセックス」を行う女性の割合が高いことが指摘されており、この点は看過できない。そして、このようなカップル間の話し合いの場では、女性は「ノー」と断ることができても、どのようなセックスを望んでいるのかということを主張できないという問題があり、それは十分に議論されてこなかった。

セックスレスのインフォーマントの場合について検討したい。20代から40代のインフォーマントの特徴として、自己目的的なセクシャリティが育てられていないことからセックスレスが生じることが考えられる。つまり、自分自身が持っているセクシャリティをカップル間で充足

したいのにも関わらず、相手との性的なコミュニケーションが成り立たない（例えば、相手に拒否されたら、どうすれば良いかわからない。性行為で苦痛を感じてもどのように相手に伝えれば良いかわからない。マナー化を改善したくても、どのようにすれば良いかわからない）。このような状態が起きると、コミュニケーションを取るよりも「女性として～するべき」、「男性として～するべき」、「日本だから」という認識が強まることから、男女における性関係では個人と他者の主体性よりも、ジェンダーと社会的規範が強いことが言えるのではないか。そのため、改めて日本でいわれている「セックスはコミュニケーション」ということを考え直す必要があり、今後の課題である。

そして、日本の場合、男女間のセックスは必ずしも「コミュニケーション」と結びついていない。特に30代の女性の場合、セックスは重要な「コミュニケーション」というよりも「子ども作り」という発想の方が強く、その点に関しては西欧とは異なる。

これらを踏まえて、現代日本社会では「コミュニケーション」という言葉は曖昧に使用されているため、人々は矛盾する性意識の価値観の中で生きているという仮説を立てた。

自閉的なセクシャリティ

男女間のセックスレス現象の先行研究では、日本の男女はセックスに関心がなく、性的に消極的になっていることが指摘されているが、本論文では、セックスレス現象がもたらす新たなセクシャリティの形態についての問いも立てる。

インフォーマントは、カップル間の性生活を構築すること、及び構築し続ける願望が希薄である（または、自分と相手の性的なプロファイルが異なり、相手に望む性生活をどのように伝えれば良いかわからないため、2人の性生活を作り上げるのが困難である）。一方、セックスはカップル外で行うこともある。例えば、婚外恋愛や性風俗を利用することで、カップル内で得難い性的な快楽を味わっている。しかし、なぜ婚外恋愛では、望む性的な快楽を充足できるものの、カップル（夫婦）間では、自分が望む性行為を相手に伝え、「相手が嫌がる」「もう言っても遅い」、そして「これで別れたら嫌だ」と考えるのかという新たな疑問が湧く。

同時に、そもそも性的欲求を満たすには、他者が必要ではなく、アダルト・ビデオを利用し、マスターベーションをすることで、どんどん自閉的になるという現象もみえてくる。

現代社会ではセックスレス化するカップル（夫婦）が増えると同時に、性的な快楽を満たす手段が多様であり、カップル間のセックスは性的なコミュニケーションや親密性から離れ、別の領域で性的な快楽を満たす傾向に進んでいることが考えられる。このような傾向は、インタビュー調査においてセックスレスが生じて「満足」と回答する男女が増えていることから推測できる。

西欧において、性行為はあくまで2人の身体が関わるものとして議論されてきた。Lautmannによると、セックスでは身体と身体が他の行為よりも密着し、空間的距離が近くなる(Lautmann 2002)。今回のインタビュー調査では、セックスレス男女は、自分と相手の望ましい（精神的と肉体的に満足する）性生活を2人で作り上げることを楽しむよりも、セックスは「1人のもの」になっていることも見られる。本論文におけるセックスレス・カップルの研究からは、セックスという行為における「身体」への認識が変化していることも考えられる。2人の体で愛撫するよりも、自閉的なセクシャリティになり、「2人のセックス」から「自分だけのセックス」にシフトしていることが考えられる。

以上の考察を踏まえて、男女間におけるセックスレス現象の言説について次のようなことがいえる。セックスレスが進行する1つの要因として、セックスに関心が無い若者が増えているという理由が挙げられる。セックスに関心が無い若者も増えていることは、本論文第1章で取り上げた先行研でも明らかとなった。一方、セックス自体に関心はあるが「2人でのセックス」で

はなく、自閉的なセックスに関心が向いている男女が存在することも今回のインタビューでは明らかとなっている。カップル間のセックスレスが増えているからといって、カップル間の「セックス」がないわけではなく、むしろセックスレスがもたらす新たなセクシャリティについても検討する余地があると考えられる。Foucault(2017),Bauer(2003)はセクシャリティが社会や時代によって変わるものであり、特定のセクシャリティ現象が消えると、新しいセクシャリティの形態が生まれると指摘している。彼らの議論を日本の事例に当てはめると、カップル間のセックスが失われた先にある新たなセクシャリティ現象を見て取ることができる。このような状況を踏まえて、セックスレスがもたらす新たなセクシャリティ現象の分析は今後の課題とする。